

むね よし 旧柳宗悦邸 (日本民藝館西館)

Yanagi Residence

民藝の美が息づく昭和初期のモダンな住宅

東京都目黒区の旧柳宗悦邸は民藝運動を普及した思想家の邸宅。実用的な「ふつう」の工芸品に美を見いだした柳は、「民藝」の美意識を自らの暮らしを通して表現。家具や食器はもとより、建物も伝統的かつモダンな美しさをたたえている。1935(昭和10)年竣工。長屋門は国登録有形文化財。



小梁現しの漆喰天井とベイウインドウが特徴的な柳宗悦の書斎。手仕事の粋を感じさせる障子には建具へのこだわりも感じられる。



①大谷石の屋根・腰壁が美しい長屋門。柳は石屋根の重厚な造形美を好んだ。門左を応接室、右を妻・兼子の音楽室に改築した。②化粧垂木やかえる股など、伝統的な和風の意匠が目を引く。



2階出窓や持ち送りがモダンな印象の主屋。当時としては珍しく1階の一部にしか雨戸がないなど、随所に柳のデザインが息づく。



高勾麗の古墳内壁画写真や朝鮮時代の鉄鉢、柳が監修した椅子が置かれた長屋門内部。豪社な梁と調和する右手の窓枠も柳の考案。



応接室。床の間は椅子座に合う高さに設計された。



当時はテーブルと椅子が置かれていた食堂。和室と続き部屋になる。和洋の意匠が柳特有の美意識によって組み合わされた。



付書院のある1階南側奥の客間。初めは母の居室であったため、柳が女性を意識した繊細な装飾でしつらえた。母の没後は柳夫妻の居室となった。



①書斎の三方に書棚があり、膨大な蔵書を収めた。
②書斎引き戸。柳の指示で桟を面取りにした。



長男・宗理のアトリエでもあった部屋。造り付けのベッドがある。

日本で西洋美術が礼賛された近代、柳宗悦は無名の職人が手がけた日用の工芸品に美を見いだした。1925(大正14)年、河井寛次郎・濱田庄司と「民藝(民衆的工芸)」という新語を作り、日本の伝統美をベースに洋の東西を超越した新しい美を探求する民藝運動を開、昭和11年には日本民藝館を建設した。筋向かいに建つ自邸はその前年の竣工である。自邸は長屋門と主屋からなる。昭和9年、明治13年建築の豪農の長屋門を栃木県から移築。柳は大谷石の屋根・腰壁を持つ長屋門に引き戸・壁をしつらえ、床には四角形の溝を切った大谷石を敷いて玄関とした。

翌年、柳が設計した主屋が竣工。居室は南北に並び、中廊下に設けた段差や表・裏2つの階段で公私の区別を意識したと思われる。奥の2部屋が家人用和室であるのに対し、玄関寄りの食堂は板間、漆喰天井で洋風のしつらえ。当時はテーブルが置かれ、民藝の同人など、多くの来客が集った。続く客間は小上がりの和室で、食堂の椅子座の人と視線が合う工夫が見られる。仕切りの建具を取り払って2間続きにし、宴を催したことでも現代の住まいに受け継がれるスタイルとなった。

柳の書斎は2階中央にある。自らデザインした造り付け書棚、民藝同人の黒田辰秋作の机、イギリス製のゆったりした椅子が思索の時間をしのばせる。ベイウインドウ(洋風出窓)や、食堂にも見られる切子格子風の障子など、多様な文化を背景とする美が調和している。柳と声楽家の妻、母、3人の息子たちは、柳が美意識を駆使して建てた邸宅に住み、民藝の美を備えた調度品、食器を使って暮らし始めた。美は暮らしに寄り添うと考えた柳の思想がここで実践され、さらに民藝の美を伝える日本民藝館へと受け継がれていった。



中廊下と裏階段。邸内には2つの階段があった。



裏階段をのぼると、息子たちの部屋近くに洗面台がある。



用語説明

【河井寛次郎・濱田庄司】民藝運動の同人。ともに陶芸家。
【長屋門】武家の門形式の一つだったが、明治維新以降、富裕な農家にも普及した。
【黒田辰秋】民藝運動の同人。漆・木工家。